

## 序章

セミナーシリーズ「考古学と現代社会」は対話から生まれた

吉田 泰幸

本書のもととなった金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター主催のセミナーシリーズ「考古学と現代社会」は、本章の執筆者である考古学者の吉田泰幸と文化人類学者のジョン・アートル (John Ertl) の対話から生まれた。その経緯、吉田とアートルのバックグラウンド、そしてセミナー自体もゲストスピーカーの発表後の対話を重視してきた理由などを記して、本書の序章としたい。

### 考古学者、人類学と文化資源学に出会う

本章筆者の吉田は日本列島の先史文化である縄文時代、近年はそれに加えて東南アジア考古学を研究している考古学者である。人文系の常として、すんなりと学位取得に至ったわけではない。縄文時代の考古学の中でも、本書で何度か話題に上る日本考古学の「型」として、例えば土器の研究に没頭し続けていたわけではなかった。単に飽きっぽいのかもかもしれないし、あるいは幸いにも興味の赴くままに研究する環境にいたと言えるのかもかもしれない。学位論文自体は縄文時代の身体装飾をテーマとする研究論文集のような体裁で完成させたが、名古屋大学考古学研究室が主体となっておこなう発掘調査と発掘調査報告書作成に参加したり、本書のテーマの一つである埋蔵文化財センターによる発掘調査に参加したり、著名な学者が若き日に調査収集した考古資料コレクションの整理にも関わった。本書で扱うテーマの設定には、これらをとおしたさまざまな経験が程度の差はあれ、影響を与えている。学生時代を過ごした考古学研究室では、総じて日本考古学の枠組みで教育を受け、研究をしていたと言える。学生の期間が長かったこともあって自分に埋め込まれる形となったその枠組み自体が変化することになるのは、博士課程後期修了と前後して勤務し始めた南山大学の人類学博物館での経験をとおしてである。

南山大学人類学博物館は現在では日本のみならず世界でも稀な、いくつかの例外をのぞいて展示資料を手にとることができる、展示資料に触ることができるユニバーサル・ミュージアムである。筆者が勤務し始めた時は、そのような形にリニューアルされる以前であった。博物館コレクションの調査研究を深め

るとともに、どのように博物館をリニューアルするかを模索するために、文部科学省からの補助金「私立大学学術研究高度化推進事業によるオープン・リサーチ・センター整備事業」（以下 ORC）によって「学術資料の文化資源化に関する研究」が行われていた時期でもあった。筆者が「文化資源」なる言葉に出会ったのはこの時が初めてである。筆者は ORC プロジェクトにはもっぱら事務的な補佐のみで、学術的な意味で貢献することはなかったが、そこで垣間見たことは非常に印象的だった。ORC にはいくつかの部会が立ち上げられており、その中の「博物館部会」では、博物館の歴史を振り返るとともに、博物館の存在自体を批判的に検討する論者が公開研究会に招聘され、議論を繰り返していた。その議論とは、博物館を近代国民国家という思想を再生産する装置と捉える見方や、ポスト植民地主義における民族資料の扱いに関するものだった。それらを語る論者の多くが共通してジェームズ・クリフォードに言及し、文化人類学がその方法論的基盤である民族誌 (Ethnography) を書くという方法自体を問い直しているのを知った。正直に言って、そこまで自己批判をするのが奇異に見えたりもした。しかし、いざ自らを振り返ってみると、それまでは博物館に対して研究資料を収蔵している場所程度の認識しかなかったことに気がつくとともに、その視点を人類学と同じく近代に生まれた学問の一つである考古学に適用する試みにも目を向けたのには、人類学博物館での経験が大きく影響しているのは確かだと思う。

その後、博士研究員として 2009 年末に着任した金沢大学で、再び「文化資源」なる言葉に出会うことになる。着任当時は本書の発行主体である国際文化資源学研究センター（2011 年 2 月創立。以下、「センター」）が発足する前だっ

**縄文時代の身体装飾をテーマとする研究論文集のような体裁** いくつかのケーススタディ（吉田 2003、2004a、2006a、2008a、2008b、2009）を本論として、その前後に序論と結論をつけた。

**発掘調査と発掘調査報告書作成に参加** 岐阜県南濃町（当時）羽沢貝塚の発掘調査で、筆者は「第 4 章第 4 節石器」・「第 4 章第 5 節石製品」を分担執筆した（岐阜県南濃町教育委員会 2000）。

**埋蔵文化財センターによる発掘調査に参加** 愛知県埋蔵文化財センターによる一宮市八王子遺跡、同猫島遺跡等の調査に参加している。

**著名な学者が若き日に調査収集した考古資料コレ**

**クション** 名古屋大学博物館に所蔵されている東北地方の縄文時代資料を中心とする角田文衛博士コレクション。角田博士は古代学協会の創設者。筆者はその資料紹介をいくつか行っている（吉田 2004b、2005a、2005b、2006b、2007a、2007b、渡辺・吉田 2005）。

**展示資料に触ることができるユニバーサル・ミュージアム** 国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏（13 歳のときに失明している。主な編著に 2012 年の『さわって楽しむ博物館：ユニバーサル・ミュージアムの可能性』）の活動にも影響を受けている。健常者を「見常者」、視覚障害者を「触常者」と相対化した上で、視覚障害者にも楽しい博物館はそれ以外の人にも楽しいというコンセプトを打ち出している。

たが、立ち上げに奔走していた、後に初代センター長となる中村慎一氏の言から窺えたのは、これも本書のテーマのひとつである「危機」、具体的には現在の大学を取り巻く環境における、考古学のみならず人文・社会科学系の学問全体の危機への対応がセンターの創設の背景の一つということである。即効的なそれへの対応が「数字」であり、創立前からセンターは数字の拡大、より具体的には「評価」として目に見えやすい外部資金の獲得件数および額の増加を中心とした実績作りを基調としている。その恩恵に筆者も預かり、若手研究者・大学院生を海外に派遣する「文化資源学フィールドマネジャー養成プログラム」(2009～2012年度)を活用して、学生の時には考えもしなかった「海外考古学」に乗り出すことになる。同プログラムでは数ヶ月であるが2010年にベトナム、2011年に韓国に滞在し、ベトナムは今では研究フィールドの一つとなっている。人類学博物館での経験を契機として「日本考古学」という枠組みを問い直すとは言っても、実際に日本の外に出てしまって、それぞれの土地の考古学に触れることは最も効果的だった。両国でその土地の考古学を勉強するのに加え、それぞれの社会での先史考古学の扱い、先史考古学の成果がどのように社会に組み込まれているのかに着目したのも、本書の構想に影響を与えた経験のひとつである。同プログラムと同時期には「頭脳循環を加速する若手研究者海外派遣プログラム」として「文化資源学国際コンソーシアムの構築」(2010～2012年度)と題したプロジェクトも進行しており、本セミナーシリーズの共同企画

**博物館を近代国民国家という思想を再生産する装置と捉える見方** 吉田憲司氏が代表的な論者(吉田憲 1999)で、ORC博物館部会の公開研究会に複数回登壇していた。

**ジェームズ・クリフォード** James Clifford  
日本語に翻訳されている『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』(クリフォード・太田他訳 2003。原題は“The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art”)の283頁に掲載されている「芸術と文化の収集について」のダイアグラムはORCプロジェクト、その後、金沢大学でも目にするようになる。

**民族誌(Ethnography)を書くという方法自体を問い直している** クリフォード、マーカス編『文化を書く』(春日・他訳 1996 原題は“Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography”)が代表的。

**人文・社会科学系の学問全体の危機** これは2000年に東京大学大学院に文化資源学講座を開設した元・文化庁長官の青柳正規氏も、2014年3月の金沢大学文化資源学シンポジウム「文化資源学がめざすもの：研究・教育・国際貢献」の特別講演「東大に文化資源学を立ち上げた目的」にて同様の危機を口にしていた。青柳氏にとっての文化資源学は、研究のディシプリンから研究対象を規定するのではなく研究対象から学問を規定するもので、そのようにして立ち上げた文化資源学は、人文・社会科学系の学問でも大型研究プロジェクトの可能性に開かれるはず、とのことであった。

**2010年にベトナム** 北部ベトナム先史文化における玉器製作技術の研究と博物館や広告看板におけるドンソン銅鼓イメージの取り扱いについて調査を行った(吉田 2011)。

者であるジョン・アートルはそのプログラムを活用して、本書のテーマ設定に大きな影響を与えた研究を行っている。

本書は本センターに所属するわずか2名とはいえ複数の研究者による、考古学と人類学のディシプリンを越境するささやかな試みである。それぞれの問題意識がその試みを駆動させているのだが、大学改革の名の下で行われた上記の様々なプログラムやプロジェクトも、本書のような試みを可能にした、本書で言うところの「アクター」なのである。

## 人類学者、考古学に出会う

ジョン・アートルはアメリカ出身の文化人類学者で、カリフォルニア大学バークレー校の出身である。日本の村落研究や日本における多様性、観光人類学が主な関心だったが、考古学との関わりについての以下の経緯は、本セミナーシリーズで何度かアートル自身が述べている。アートルはカリキュラム上、考古学が人類学の一部となっているアメリカの大学において、ネブラスカ大学の学士課程ではピーター・ブリード氏、カリフォルニア大学バークレー校の博士課程では羽生淳子氏という、日本の考古学に縁が深い先生が身近な環境にいた。

その当時は考古学を強く意識していなかったそうだが、博士論文のために実施した能登半島での長期フィールドワークの最中、街づくり活動の中で考古学的発見が人々を動かしていく様子を見て、考古学的知識がどのように生み出されるのか、考古学はどのように世界を変えていくのか、そのプロセスに興味を持ち始めた。2012年度には上述の「頭脳循環を加速する若手研究者海外派遣プログラム」を活用し、カリフォルニア大学バークレー校の羽生研究室での縄文時代遺跡調査に関わる考古学的実践や、岩手県御所野遺跡公園での縄文時代の復元建物製作、北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録推進運動に關す

**2011年に韓国** 筆者の大学在学中は韓国からの留学生で考古学研究室の先輩であり、現在は木浦大学の教員となっている金建洙氏を頼って滞在した。Rescue / Salvage archaeology の韓国語訳である「救済発掘」を担当する財団による発掘調査に参加し、韓国の緊急／事前発掘についての民族誌 (Ethnography) 的調査と、博物館展示における建国神話と先史考古学の関係についても調査した (吉田 2012)。

**ピーター・ブリード** Peter Bleed  
ネブラスカ大学名誉教授。1970年代には東北大学にて縄文時代の研究を行っていた。アートルはブリード氏の次男と同じ高校に通っており、そ

の縁でブリード氏宅の日本刀コレクションで遊んでいたそうである。アートルが再びブリード氏と会ったのはアートルがJETプログラム (The Japan Exchange and Teaching Programme: 語学指導を行う外国青年招致事業) で英語教師として来日していた1990年代後半で、当時は前期旧石器の捏造が発覚する以前であった。その際の高揚と、発覚後の落胆が大きかったことがアートルには印象的だったとのことである。

**街づくり活動の中で考古学的発見が人々を動かしていく様子** セミナーの対話の中でも何回か杉谷チャノバタケ遺跡、雨の宮古墳について言及している。詳細はErtl2011、2015参照。

るフィールドワークをおこない、“Ethnography of Archaeology” (Fujii and Ertl eds. 2013) という、後述する本セミナーシリーズから発展していった共同研究プロジェクトと同名の報告書を刊行している。

### 考古学者と人類学者が「縄文／Jomon」のフィールドワークをはじめ

吉田は金沢大学に着任して間もない時に、ジョン・アートルと一度会っている。最初の仕事はアジア各国から研究者を招聘して開催した「アジア文化資源学金沢セミナー」(2010年2～3月)の運営で、セミナーゲスト講師の山下晋司氏に会うためにアートルが懇親会に参加した時であったと記憶している。その時はアートルが上述のようなバックグラウンドを持ち、日本考古学に関心を持ち始めていたとは思もしなかった。2012年度、筆者はURA (University Research Administrator) として、博士課程教育リーディングプログラム「文化資源マネージャー養成プログラム」の申請を支援しており、その間、フィールドワークを軸にした研究活動からは一時離れていた。そのため、アートルが同時期にカリフォルニア大学バークレー校の羽生研究室でフィールドワークをしていることも知らなかった。

文化資源マネージャー養成プログラムは幸運にも採択され、筆者は同プログラムの担当教員となった。最初の半年、2012年度の後半期は準備期間と位置付けられ、次年度の学生受け入れを前にして、様々な準備を行っていた。課題はいくつもあったが、**単年度主義**の常として、どのように予算を消化するかも問題だった。解決策のひとつとして、新設学問分野である文化資源学を基盤とした教育プログラムにはカリキュラムの整備が必要と称して教員の調査出張に一定の予算をあてていたが、その中に、筆者とアートルによる、2013年3月にアメリカ・ニューヨークで開催されていた“Arts of Jomon”という展覧会でのインタビュー調査があった。この展覧会を知った経緯はもはや覚えていない

**単年度主義** ある年度の予算はその年度中に使い切る原則。その影響として年度末になると道路工事が増える、研究費を用いた出張が増えるなどがある。

“Arts of Jomon” アメリカ・ニューヨークのアートギャラリーが集まるチェルシー地区にある hpgrp Gallery New York にて、2013年3月15～23日に開催された。ジョン・アートルと吉田で展覧会の企画者である当時の NPO 法人 Jomonism 代表者とメイン・キュレーターで作品出品者でもあった金理有氏にインタビューを

行った。その様子は Yoshida and Ertl 2017 を参照。

**NPO 団体 “Jomonism”** 内閣府のデータベースによると 2011 年創設だが、活動は 2009 年から始まっているようである。活動のキーワードは「Feel the roots, 」とし、空欄に参加する人がそれぞれの想いを「自由」に付け加え、ルーツを感じることで未来を今より少し「ハッピー」にできるとしている。

URL: <http://jomonism.org> (2017年2月5日にアクセス)

が、日本列島の先史文化であり、筆者も研究している「縄文」をテーマに有志が集う NPO 団体“Jomonism”がアメリカのニューヨークという街で“Jomon”をアートとして展示する、というのは上述したバックグラウンドのアートと筆者にはとても興味深かった。程なくして渡航日程が決まり、アートギャラリーが集中しているニューヨークのチェルシー地区にある展覧会場にて、会の主催者である NPO 団体の代表者とメイン・キュレーターでもあったアーティストにインタビュー調査を行ったのが、本書に繋がる直接の契機である。このインタビューをもとにした研究の一部は国際文化資源学研究センター刊行の英文雑誌に発表し (Yoshida and Ertl 2017)、こうした展覧会や団体と研究・社会との相互作用についての研究は継続中である。

### 考古学者と人類学者が研究プロジェクトを立ち上げる

ニューヨークの次にアートの母校であり、調査先でもあったカリフォルニア大学バークレー校に立ち寄り、羽生淳子氏に面会した。羽生氏は北米の大学にいながらにして日本列島の縄文時代を研究していることから、必然的に日本考古学と縄文考古学を相対化することになり、多くの日本考古学評論とも言うべき論考を執筆している。その中では、北米考古学と日本考古学の差異は頻繁に、北米＝人類学としての考古学／日本＝一国史としての考古学、北米＝演繹的 (deductive) ／日本＝帰納的 (inductive) と対比されて語られる。面会では、こうした根本的な違いがある中で英語圏において日本列島の縄文時代を研究する、あるいは日本考古学を論じることの困難さにも話題は及んだ。

筆者は中米・グアテマラに赴く途中の経由地、ヒューストンの空港で「入国」したことはあったが、アメリカの地に降り立ったのは上記の 2013 年 3 月の渡航が初めてだった。東海岸のニューヨークと西海岸のサンフランシスコ近郊を訪れたが、東西問わず大味、かつどんな各国料理も食べきれないほど大量になるアメリカの食文化に驚きつつ、レンタカーで移動する必要もあった旅の道すがら、アートの高い日本語能力もあって、話題は多岐に渡った。この研究プロジェクト、本書の基となったセミナーシリーズの方針は、この時の対話にあり、以降はそれらを肉付けしたものと言ってよい。それらは以下のとおりである。

1. 日本考古学の多様性に目を向ける：英語圏における日本考古学批評、日本での日本考古学批評がまだ目を向けていない側面に注目する。
2. 日本考古学の「諸問題」を捉え直す：英語圏における日本考古学批評が度々「問題」とするナショナリズムへの意識的・無意識的な貢献、編年研究や文化史的研究など一部の研究テーマへの偏重、行政主体の考古学的発掘調

査の功罪などの諸問題を、1の日本考古学の多様性への注視をとおして再考する。

3. 日本考古学批評の「型」を解きほぐす：上記の英語圏からの、そして日本における日本考古学の語り方も一定の「型」へ収斂する傾向にあるが、その「型」を解体し、再構築することによって日本考古学批評をより豊かなものとする。
4. 語られにくい話題をオープンにする：日本考古学批評が日本で盛んでないかと言うと、そうではない。特に研究集会後の懇親会など、お酒が入った場では頻りに語られ、その中には上記の「型」どおりの日本考古学理解を逸脱するものもあるように見える。しかし、それらは表には出にくい。そうしたことをもオープンに語る場の形成を目指す。

### 考古学者と人類学者がセミナーシリーズを企画・開催する

2013年の11月から2016年末にかけて、上記の方針のもと、6回のセミナーを開催した。第4回からは、「考古学と現代社会」セミナーシリーズと銘打っているが、第1回に遡って同一のシリーズとする。以下に各回の概要を述べる。

第1回の「縄文住居復元と史跡公園」と第2回の「歴史復元画と考古学」は、おそらく多くの人が目にしたことがある縄文時代の復元住居と縄文人の復元イメージがつけられるプロセスに着目した。それらに携わった人々との対話をとおして、「復元」が実は内包している多様な問題を掘り起こした。

第3回の「現代『日本』考古学」、第4回の「多様性・持続可能性と考古学」では、英語圏における日本考古学批評の先達との対話をとおして、日本考古学の問題点を再認識した。

第5回の「さよなら、まいぶん」、第6回の「ハイパー縄紋文化の難点」では、上記の方針2の中でふれた、英語圏からの視点で日本考古学の「諸問題」とされている事柄について、その内部から立ち上がっている問い直しに目を向けた。

各回のテーマはアートルと筆者の他愛もない会話の中から生まれることもあれば、コンセプトを入念に話し合ったこともあったが、最も重視したのは二人の両方、あるいはどちらかが話を聞いてみたい人を呼ぶことだった。そして、上記4の目的に鑑みて、ゲストスピーカーと会場の参加者も交えた「対話」に時間を割くことも重視した。後述するように本セミナーシリーズでのネットワークは「考古学の民族誌」という研究プロジェクトへと発展することになったが、2013～2016年の日本考古学のEthnographyとしての意味合いも持たせる意図もあって、「対話」セクションも重視した。

“Ethnography of Archaeology”というコンセプトは先行事例があるが(Edgeworth 2006)、もっぱら発掘調査現場におけるEthnographyに重点がある。考古

学のプロセスは発掘調査だけでなく、その前後のプロセスにも Ethnography という手法は有効だと筆者たちは考えている。Ethnography は古典的な意味では人類学者が異郷に赴き、長期間を過ごす中で得た異郷の理解を人類学者のホームに持ち帰るものだったが、近年の Ethnography はホームの中や分散的な共同体、研究のためのラボや企業社会も対象としている。考古学者だけが住むムラは存在しないので、いきおい、考古学者が一時的に集まる発掘調査の場が Ethnography の対象になったのかもしれないが、筆者たちが考える Ethnography of Archaeology のフィールドは広い意味での考古学的実践が行われている場、そして考古学に触発された活動が行われている場も広く対象としている。アートルは考古学を異郷として捉え、それを考古学に携わる人以外に伝えようとする。一方で吉田は慣れ親しんだ考古学の場を相対化した上で不思議な場として捉え直そうとする。両者の視座の交錯からテーマも設定され、セミナー当日の対話もなされている。その結果として本書は、考古学の多様なプロセスを捉まえようとする Ethnography になったと考えている。

各回のゲストスピーカーは複数を理想としていた。すでに面識があった人もいれば、直接的な接点がなく突然声をかけさせていただいた人、先に参加を承諾していただいたスピーカーからの紹介で初めてお会いした人、様々であった。各回の合間には、センターの研究教育活動が活発になったことで金沢の地に来ることになった特任教員や博士研究員、「文化資源マネージャー養成プログラム」の大学院生をメンバーとする読書会を組織し、各回のテーマに即した文献や、ゲストスピーカーが執筆した論文などを読んでいた。読書会は本書のような方向性の研究の古典的論文であるブルース・トリッガー (Bruce Trigger) の “Alternative Archaeologies: Nationalist, Colonialist, Imperialist” (1984) を皮切りに、英文論文を中心に課題論文とし、2016 年末までに 15 回開催した。

## セミナーシリーズと 2013 ~ 2016 年

第 1 ~ 3 回、そして第 5 回の計 4 回のセミナーは 2015 年 3 月の北陸新幹線金沢駅開業前に金沢で開催している。金沢のような地方都市で新しい場を作ることを目指すような集会を開くのは、集客面では大きな期待はできなかった。金沢大学は金沢城内キャンパスから角間地区への移転後、お世辞にもアクセスに便利な場所とは言えないため、市の中心部に位置していて、金沢大学の前身である四高由来の石川四高文化記念交流館を主な会場として開催した。30 人強集まれば上々という参加人数実績であったが、その分、親密な雰囲気でも議論を重ねることができたと考えている。幸いにも県内のみならず、県外からも複数回参加して下さる方々がいた。そのうちの一人に第 2 回のゲストスピーカーであり、本書の序文と表紙イラストを提供いただいたアーティスト・歴史復

元イメージ画家の安芸早穂子氏がいる。本セミナーがきっかけとなり、アートルと筆者は、安芸氏が2016年夏の第8回世界考古学会議京都大会（The Eighth World Archaeological Congress、略称WAC-8 Kyoto）でのArt & Archaeology イベント開催のコンセプトを練る目的もあって設立したKyoto Art & Archaeology Forumに、数回参加することになった。この活動はWAC-8会期中に建仁寺両足院で行われたGarden of Fragment展として結実する。筆者はその展示に作品出品者としても参加することになり、セミナーシリーズ開始時には思いもよらないことに発展することとなった。

セミナーシリーズを通じたネットワーク構築は、アートルを代表者とした国立民族学博物館共同研究「考古学の民族誌：考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」（2015年10月～2019年3月、アートル2016）へと昇華することになった。共同研究メンバーには本セミナーシリーズのゲストスピーカーも複数含まれている。また、メンバーの一人には、松田陽氏がいる。松田氏は『入門パブリック・アーケオロジー』（松田・岡村2012）の中でパブリック・アーケオロジーの4つのアプローチを提唱している。広報的、教育的、批判的、多義的アプローチの4つであるが、そのうち後二者とセミナーシリーズのコンセプトは親和性があるのでは、と筆者たちはセミナーを企画する中で話題にしていた。その折、当時英国・ノリッチのイーストアングリア大学講師であった松田氏が来日し、名古屋で講演をするとのことで、アートル、筆者、大学院文化資源マネージャー養成プログラム学生とで参加し、半ば押しかけるようにその懇親会にも参加した。帰り際、「次はノリッチでお会いしましょう」と松田氏と別れたが、それは2014年3月に同プログラムの学生一部を引率しての研修旅行という形で実現し、さらに筆者はセインズベリー日本藝術研究所の日本考古学フェローとして英国・ノリッチを拠点に2015年10月末から2016年10月末の1年間、英語圏の考古学を体感することにもなった。それらをとおして得た経験も、本書に反映されている。

**世界考古学会議** World Archaeological Congress、通称WAC。1986年にイギリスのサウザンプトンで開催予定であった先史学・原史学国際連合（IUPPS: International Union of Prehistoric and Protohistoric Sciences）に、当時人種隔離政策をとっていた南アフリカとナミビアからの研究者の参加を容認するかどうかで紛糾した際、基本的人権の尊重の観点から受け入れないことで現代社会の問題にも関わることを選んだグループが立ち上げた国際会議。WACの成り立ち

やその政治性、「アカデミック・フリーダム」との関係などの論点は、最近では例えば富井2013に詳しい。

**名古屋で講演** 2013年10月27日に名古屋市立大学で開催された「現代社会における文化財保護の新しいあり方：『パブリック・アーケオロジー』の視座から」というシンポジウムで、松田氏は「パブリック・アーケオロジーから文化財保護への提言」と題した基調講演を行った。

## 本書の構成

本書は7章の構成である。第1～6章は各回の開催経緯などを記したイントロダクション、スピーカーの発表記録または要旨、対話記録、筆者執筆による各回を「ふりかえる」小文からなる。「ふりかえる」文章は各スピーカーの発表内容とその後の対話の解題でもあり、分析でもある。その内容には、筆者のこれまでの経験＝“Ethnography of Archaeology”をとおして各回で見えてきたものも含まれている。以下に「ふりかえる」文章の概要と浮上してきたキーワードを示す。

第1回の「縄文住居復元と史跡公園」では観光人類学の理論を援用し、復元住居の Authenticity（真正性）を考察したほか、Obduracy（変化しにくさ）を分析概念として提示した。第2回の「歴史復元画と考古学」では、第1回のキーワードを分析概念として引き継ぎつつ、復元画に不可避免的に含まれる詩学と政治性（Poetics and Politics）にも言及した。

第3回の「現代『日本』考古学」、第4回の「多様性・持続可能性と考古学」でも、Obduracyは問題となる。それは海外の考古学事情にも通じる各論者が、そうした視点から提示する日本考古学の「危機」の源泉でもあるかもしれない。その危機への対処法の一つは、例えばこのセミナーシリーズのような場、考古学自体について語る場をどう形成するかも含まれる。

第5回の「さよなら、まいぶん」、第6回の「ハイパー縄紋文化の難点」でも、「危機」は語られる。それは日本考古学の特徴とされる「埋蔵文化財保護体制」の存続の危機でもあり、実証的で手堅いとされる「型式学」に立脚した方法の有効性への重大な疑義でもある。それらへの対処は、それぞれの考古学的実践の再考からはじまることを指摘した。

最終の第7章ではアートルが英語の解説を執筆している。そこでの考察をもとにした、広い意味での人類学的な考古学、あるいは考古学的人类学的研究は今後の課題としたい。なお、本章も含め本書全体にわたって下部に註が入っているが、それらは吉田が執筆した。その中に事実誤認などがあれば吉田の責任である。

6回のセミナーの開催概要は以下のとおりである。括弧内の肩書きは当時、\*はゲストスピーカー。

#### 第1回 縄文住居復元と史跡公園

日時 2013年11月30日

場所 石川四高記念文化交流館 多目的利用室3

1. 高田和徳\* (御所野縄文公園／世界遺産登録推進室)「縄文時代の建物復元の手法と課題：岩手県御所野遺跡の事例から」
2. ジョン・アートル (金沢大学国際文化資源学研究センター)「考古学の多様性と縄文時代の復元」
3. 対話

#### 第2回 歴史復元画と考古学

日時 2014年1月25日

場所 石川四高記念文化交流館 多目的利用室3

1. 吉田泰幸 (金沢大学国際文化資源学研究センター)「縄文人はどのように描かれてきたのか」
2. 安芸早穂子\* (歴史復元イメージ画家)「縄文人をどのように描いてきたのか」
3. 小山修三\* (国立民族学博物館名誉教授)「なぜ『おしゃれ』な縄文人を描こうとしたのか」
4. 対話「これから縄文人をどう描くのか」

#### 第3回 現代「日本」考古学

日時 2014年3月15日

場所 石川四高記念文化交流館 多目的利用室3

1. 溝口孝司\* (九州大学)「現代日本の考古学、社会、アイデンティティ」
2. 岡村勝行\* (WAC Japan 事務局)「日本におけるパブリック・アーケオロジーを考える」
3. 対話「現代『日本』考古学」

#### 第4回 多様性・持続可能性と考古学

日時 2014年10月26日

場所 東京国立博物館 平成館小講堂

1. 羽生淳子\* (カリフォルニア大学バークレー校／総合地球環境学研究所)「食の多様性と文化の盛衰」
2. 松本直子\* (岡山大学)「ジェンダー教育と考古学」
3. 対話「多様性・持続可能性と考古学」

第5回 さよなら、まいぶん

日時 2015年1月24日

場所 金沢歌劇座 第6会議室

1. 赤塚次郎\* (NPO 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長) 「文化遺産を機能化する NPO セクター」
2. 岡安光彦\* (株式会社 四門) 「もしドラッカーが日本の『まいぶん』の現状を眺めたら」
3. 対話「さよなら、まいぶん」

第6回 ハイパー縄紋文化の難点

日時 2016年12月17日

場所 石川四高記念文化交流館 多目的利用室2

1. 吉田泰幸 (金沢大学国際文化資源学研究センター) 「縄文と現代日本のイデオロギー」
2. 大塚達朗\* (南山大学) 「消費される縄紋文化」
3. 対話「ハイパー縄紋文化の難点」